Photo俳句

陽香庵 百合樹

(2013-01 No.05)

除夜の鐘

風止みて
　澄みて聞こゆる
　　除夜の鐘

・１日中吹き荒れていた風が１２時を過ぎると、ようやく、静まってきた。
・風にかき消されていた除夜の鐘が、澄んで聞こえてくる。
・新しい年が静かに明けた、世の中、ことし１年、平穏でありますように。
・この時期、別荘地に灯が増え、我が家から見える、山の上まで続く夜景が美しい。

初日の出

留田浜
　今年も元気
　　初日の出

・宇佐美海岸・留田浜の先端まで車で行く。海岸には既に多くの車と人が出て、初日が出るのを待っている。
・気温３度なれど、風なく、寒さも気にならない程度のさわやかな元旦だ。
・鳥が鳴き騒ぎだした後、海から顔を出した太陽は、万物を照らしながら、瞬く間に昇り、雲間に入り込んだ。今年も元気で無事に過ごせますよう初日に向かって祈念する。太陽に勝る自然エネルギーはない。

寝正月

省エネや
　湯たんぽ入れて
　　寝正月

・元旦、金粉入りの日本酒を小さなグラスに３杯飲んだら、顔が真っ赤になっていた。
・湯たんぽに熱い湯を入れなおして、寝床にもどり、新年恒例の「ニューイヤー駅伝」を見る。群馬で行われる同駅伝は、小生の故郷・太田市内も通過する。両親が健在なころ、正月に帰ったおりに、二度ほど実際に見たが、その速いことに驚いた記憶がある。テレビで見る故郷の光景、時々知った風景が映し出されるのが懐かしい。
・次女がオーストラリアだったかニュージーランドだったかに短期留学した折に、お土産で買ってきたプラスチック製の湯たんぽが今、我が家では再び脚光をあびている。あの時、おみやげがなぜ湯たんぽなんだと嘲笑したことを、あの時に戻り撤回したい。英文科に行かせたのが機縁で、今は遠いアメリカで住むことになってしまった次女。正月だというのに、愛しい孫にはスカイプでしか会えない。

門飾り

珍しや
　竹へび登る
　　門飾り

・産直市場「いで湯っこ市場」の干支をモチーフにした門松がユニークで評判に。松の内が過ぎても飾ってあるので一度は見ておきたい。

伊東の日

伊東の日
　少しの予算で
　　贅沢す

・１月１０日は語呂あわせでいとうの日だ。この日は市内の２２４の参加事業所で、お得な商品やサービスを提供するというので、昼ちょっと過ぎに出かけた。
・まず、１３５号線を伊豆高原に向かって下り、海鮮料理「文らく丸」に入る。思ったより空いていて先客は２人。１０日、１１日の各日限定２０食のサービス「おまかせ海鮮丼」を頼む。通常1890円の丼が1010円だ。席に着くと、２人一組のお客が入ってきた。我々も、先客も、今来たお客もみな、お目当の限定サービス丼を注文した。次いで入ってきた２人に店主は、限定数が終わってしまいましたと告げる。横浜からわざわざ来たのだと食い下がるが、他のメニューもたくさんあるのでどうぞと、座敷に招き入れられる。空いてなんかいなかったのだ、最初の一団が去った後に運よくセーフだったわけだ。貴重な「おまかせ海鮮丼」を美味しくいただいた。
・このお店は、以前にも何度かお邪魔したことがあるが、若い板前さんのわりには丁寧で美味しい料理を出す。大きな金目鯛の姿焼きがオススメだ。
・食後、「池田２０世紀美術館」に行く。入館料９００のところ、今日だけ１１０円なり。いつもより人が多かったが込み合っているほどではない。ちょうど、今日から、所蔵風景画展を開催していた。ここで、時間をつぶして、３時から入浴ＯＫとなる「かんぽの宿　伊豆高原」の日帰り入浴へ。本日限り１人８００円の入浴料が半額サービスだ。
・今日の予算は1,010円＋110円＋400円=1,520円なり。3,590円のところ、2,070得したことに

なる。少しの予算で、プチ贅沢ができた。
・どうせなら、５月１０日もいとうの日にしたらいかがか。

白岩の
　溢れし温泉を
　　独り占め

・体験農園の帰りに立ち寄る日帰り温泉が６つあるが、ここ白岩荘の温泉がいちばん好きだ。
・やっている時は看板の横に手書きの小さな看板が出る。
・今年は、今日（６日）から始めたとのこと。駐車場に車が１台止っていたが、その先客がちょうど出たところだった。以降、小生だけ、窓を開けて、風を受けながら入る。浴槽から畑が見える、女主人がやっている無農薬・有機農法の農園だ。今何が採れているのかとか、何を植え始めたのか、参考になる。
・ここは、おばあちゃんと娘の２人でやっているが、おばあちゃんの元気な姿に今年もお会いできて嬉しい。
・近くには国指定史跡上白岩遺跡があるが、このへんは縄文の昔から温泉が出ていたのかもしれない。
・ここは、穴場なので、あまり教えたくなかったので温泉通信簿（立寄り湯・伊豆編）にもこれまで載せなかったのだが・・・・・・。

どんど焼き

どんど焼き
　飾りの数を
　　競い合い

・田んぼや公民館の庭に、この時期、どんど祭りのやぐらが立っている。正月飾りやだるまを吊るす。この量の多寡で、その地区の過疎化状況が推定できる。家並みの多い地区は大きく立派だが、山間の集落地区では、やぐらこそ高く聳え立っているものの。松飾の数がぐっと少なくなる。
・一般的には１４日に火がつけられるようだ。

昇る陽

昇る陽や
　帰る漁船に
　　行く小船

・連休で、長女家族が来て、下田の濤亭（とうてい）に泊まる。
・昇る朝陽を見せたくて、孫を起こして、部屋のカーテンを開ける。
・太陽が昇る時期、漁を終えて港に帰る漁船と、釣り客を乗せた釣り船が、影絵のように浮かび上がる。
・浜辺では、サーファーが1人海に入っていた。
・一幅の絵画のような日の出を私の横で孫も黙って見ていた。

入田浜
　干支の絵を描く
　　孫９歳

・朝食後、宿（濤亭）の前の海岸（入田浜）に降りる。
・小さな海岸だが、まるで宿のプライベートビーチのようだ。
・しばらく、波と戯れていた孫は、砂浜に、今年の干支であるヘビを描いた。
・１月７日で、９歳になった孫は、小さい時から絵を描くのが好きだった。係累に絵描きはいないので、才能はないかもしれないが絵を描くことが好きな子供、本を読むことが好きな子供が、私は好きだ。

砂滑り

砂滑り
　途中で止る
　　孫重し

・昨日泊まった宿の近くに、サンドスキー場があるので、孫達を案内して行った。
・田牛と書いてトウジと読む信号を入って海に出て右に曲がって、すぐのところにある自然に出来たものだ。砂が風に吹き上げられて出来たもので、斜度が３０度。もちろん、無料だ。
・前々から、孫を案内したくて、プラスチック製の滑り板を買っておいたが、最近、孫がメタボ気味になったし、身長も伸びたので、この用具では、体の重みで、砂に潜り込んでしまい、途中でストップしてしまう。
・それでも、なんどか上まで登って、チャレンジを試みている。子供の成長は早いものだと、あらためて、実感する。

竜宮窟
　見上げる孫や
　　頼もしい

・サンドスキー場の隣に、天井がぽっかり空いた不思議空間名勝「竜宮窟」がある。
・孫達を案内して、降りてみる。
・孫が岩場や洞窟壁に近付くと、危ないからと、母親、父親が代わる代わる注意を呼びかける。
・そんな注意に耳を貸さない孫は、あちらこちらに、軽快に移動する。私は、足場が不確実な場所は苦手なので、遠くで見守るだけ。
・男の子だもの、少しばかり、腕白でちょうどいい。

柿八年

柿八年
　植えて長生き
　　祈念せり

（長者が原農園日誌）
・渋柿（蜂尾）の苗を購入し、畑の隅に植える。
・昨年、大家さんから、渋柿を自由に採果していいと、いわれたが、木が大きすぎて、登らないと充分に採れなかった。小生の歳では、木登りは危険なので、今年は、柿の苗を植えさせていただいた。
・辛抱の勧めのことわざに「桃栗３年柿８年」とあるが、昨年アメリカの地で産まれた孫の成長も見届けたいので、柿木を植えれば元気で長生きできようという期待も秘めて植えた。

茱萸（グミ）

茱萸植えし
　不老不死の
　　果実酒もとめ

（長者が原農園日誌）
・茱萸（グミ）の苗を購入し、畑の隅に植える。
・少年の頃、実家（群馬）の前にあった小川の土手に、茱萸（グミ）が群生していた。赤い実がなるころに、朝鮮のおばあさんが採りに来た。たしか、料理だったか漬物だったかに使うためだったと聞いた記憶がある。
・昨年、乾燥グミを購入して果実酒を造ってみたが、いまいち、美味しくない。そこで、今年は茱萸を育てるところから始めることにした。野山に自然に生育するものだから、育て方もラフでよさそうだ。
・「グミの実にはビタミンＥが沢山含まれており、その量はフルーツではトップクラス。その働きは強い抗酸化作用で、活性酸素を抑え体内の不飽和脂肪酸の酸化を防ぎ、動脈硬化や心筋梗塞などの生活習慣病の予防に効果があるとされています。」（旬の食材百科）

大根

大根に
　土をかぶせて
　　暖をとり

・長者が原農園は連日、高い霜柱ができるほど、厳しい寒さにみまわれている。
・青首大根が高く土から飛び出し、葉も枯れてきて、寒そうだ。
・大仁の師匠から「大根に土をかぶせると寒さで凍りつくことからしのげる」とのアドバイスをうけ、早速、土をかぶせた。大根もやっと、あたたかそうになった。

人参が
　凍てつく畑に
　　しがみつき

・朝食時に飲む生ジュース用に、毎朝、人参とケールを採る。
・霜が降り、凍てついている畑で、人参は土にしがみつくように健気に頑張っている。
・葉をつかんで抜こうとするも抜けない時がある。そんな時は、周りにスコップを差し入れてやると、あきらめて抜けてくる。
・抜かれたばかりの人参は、いわゆる人参臭い独特の香りがする。いかにも俺を飲めば身体にいいよとばかりに。

葱の香

畑帰り
　強い葱の香
　　窓開り

・凍てつく畑で葱の外葉は枯れているが、中から若い葉が顔を出し始めている。抜くと白い部分が長い。車の中が葱の匂いで充満している。寒いのに、思わず車の窓をあける。
・この匂いを発している新鮮な状態で調理すると薬効があるように感じる。葱は風の予防にいいそうで、鍋によし、丼物によし、味噌汁にもあい、使い勝手のいい野菜だ。ただ、焼いただけの葱も酒の肴にいい。
・冬の寒さに耐えてる葱の白い部分の甘みが増している。
・冬葱は外見は悪いが中身がいい男のようでたのもしい。

焚き火

炎立ち
　顔照らされて
　　本を読み

・焚き火は男のロマンだ。
・でも、実際には焚き火ができる環境はごく限られている。
・数年前、台風で屋根が飛び、リフォームするのに際して、暖炉を造りたいと大工に相談したら通常の家屋では換気の問題で無理ですと、断られた。
・年明けに、畑の大家さんに会い、畑での焚き火をＯＫしてもらった。昨年末に大家さんが切った木の枝が穴に入れてあって、完全に乾燥しており、焚き火にもってこいの条件だ。そのうえ、畑の内外には枯れ草や枯れ枝が豊富にある。
・火をつけると、炎が勢いよく立ち上る。近づくと、輻射熱で顔が熱いほどだ。椅子に座り、持参したお茶を飲みながら電子ブックで本を読む、至福の時間である。

石松の墓

石松の
　墓を削りて
　　勝ち祈願

・遠州森町、曹洞宗大洞院の境内入り口にある森の石松の墓。
・墓のそばに立てられている掲示板によると、
昭和10年に墓建立。
昭和18年に現在地に移転
昭和28年、隣に清水次郎長の墓建立。この頃から石松の墓が削られ始めた。
昭和52年、墓石の変形があまりにもひどいので、二代目の石碑が建立された。
昭和54年、二代目の墓石が盗まれたため、3代目墓石建立、次郎長の碑も建立。
平成7年　墓石修復。
・今回の墓石は硬そうな石で造られていて、おいそれと削られないようだ。
・墓石の前には、お賽銭に混じってパチンコ玉や馬券が供えられている。
・ギャンブルに霊験あらたかなだとして、お参りする人が少しずつ削るようだ。墓ごと盗むのは尋常ではないが、ばくち打ちでならした石松の墓じゃないか、けちな事をいうと石松が泣くぜ！むしろ、削りやすい（柔らかい）石にして、どんどん削ってもらったらいい。ギャンブルの神様との評判が立てば、観光客も多く集まり、森町もにぎわうというもんだ。集客の目玉となりゃ、墓石なんぞ、何回立て直してもいいじゃないか！ＰＲツールと考えれば安いもんだ。

立あがり石

家康に
　あやかり座り
　　立ちあがる

徳川家康公の天下統一の基は浜松在城15年間の苦労の賜ものといわれる。三方原合戦の前年元亀3年9月願文と三条小鍛冶宗近作の太刀を当社に奉りて戦勝を祈願し次いで天正2年4月、犬居城攻略の際に参拝しこの石に腰掛けて休息されたと伝えられる。以来このことを苦境を乗り越えた「立あがり石」と言われ、石にあやかりたいとして人生の再起を念じて石に腰掛けて帰る人が少なくない。（遠州森町、小国神社境内、立あがり石の看板より）
・ちょうど休憩に腰を下ろすのにいい。いまさら、立ち上がっても遅いか！？

蝋梅

蝋梅の
　シワ無き花に
　　嫉妬せり

ロウバイ（蝋梅、椋梅、臘梅、唐梅、Chimonanthus praecox）は、ロウバイ科ロウバイ属の落葉低木。1月から2月にかけて黄色い花を付ける落葉広葉低木である。花の香りは強い。名前に梅がついているためバラ科サクラ属と誤解されやすいが、別属である。 唐の国から来たこともあり唐梅とも呼ばれ、中国名も蝋梅であったことにちなむ。本草綱目によれば、花弁が蝋のような色であり、且つ臘月に咲くからこの名がついた。 花やつぼみから抽出した蝋梅油（ろうばいゆ）を薬として使用する。（Wikipedia）

・伊東市松川湖畔にて
・地味な花ではあるが、春に先駆けて咲く健気な姿がいい。老衰したようなしょぼくれた姿に見えるが、近づいてみると、艶やかな若々しい肌をした花である。ブスだが、肌の肌理（きめ）が細かく張りがありぽっちゃりとした愛くるしさのある女性のようだ。時として、美人よりももてたりする。美人は３日で飽きるがブスは３日で慣れるとは言いえて妙である。老妻のシワも徐々に増えるので慣れてしまうようだ。

月明かり

月明かり
　電気点けずに
　　朝着替え

・寝過ごしたかなと思って起き上がると、まだ４時。満月の明かりが、部屋の隅々まで届いている。
・そのまま、電気を点けず、月明かりを頼りに、着替える。昔から、パジャマのままでいるのが嫌いで、朝、目が覚めたらすぐに、洋服に着替える。
・省エネが叫ばれている今、月照明も利用したいものだ。

みなみの桜

先陣を
　争い咲けり
　　川桜

・１月２９日、河津、爪木崎、下賀茂と花めぐりに出かける。河津の桜は未開花、爪木崎の水仙は８分咲きだが。今年の花のつきは、やや悪い。下賀茂の菜の花畑は虎刈り咲きで、今年は不作のようだ。
・そんな中、南伊豆町、みなみの桜がぽつんと咲き始めている。湯の花観光交流館内にあるアートギャラリーの女性が、みなみの桜の方が河津桜よりいいよと自慢する。そして、観光交流館の駐車場はタダだしとアピールしていた。屋台は出ないが、観光交流館内の産直市場も品数が多く人気がある。
・伊豆半島のあちこちで、桜の早咲き競争をしている。宇佐美の桜、大室山麓の桜の里、四季の花公園などの桜も早く咲く。伊豆はもうすぐ冬の明ける気配がしてきた。

西伊豆の夕日

陽が沈む
　飛行機雲が
　　海に落つ

・西伊豆の夕日がいい。特にこの時期は、飛行機が雲を作って飛ぶ。陽に反射して機影が輝き、沈む夕日に向かって海に落ちるように見える。地球が丸いんだと実感する。
・戸田港からみる夕日の右側には富士の雄姿と遠く南アルプスの雪山が見える。

蛇石の
　名の由来なり
　　頭出し

・南伊豆の山の中にある食事処「びゃく」で昼食を食べた後、蛇石峠経由で西伊豆方面に行くことにした。
・「びゃく」は鄙にはまれな美味しい食事どころだ。近くに来たら必ず寄る場所のひとつだ。
・びゃく定食とズガニ汁を注文。地魚寿司が美味い。ズガニは上海ガニ系列の美味しいカニだというので、以前、産直市場で買い求めて、苦労してズガニ汁を作ったものの、まずくて難渋した経験がある。でも、ここで食べたズガニ汁は美味しかった。ズガニは宇佐美の烏川でも容易に採ることができるが、しばらく清水で泥を吐かせてから調理するのだそうだ。まずかったのは調理のしかたが悪かったようだ。でも、作るのが面倒なので、今後も、専門店で食べるにしかずだ。
・蛇石峠は何度か通ったことがあるが、蛇石なるものは見たことがなかった。先日、テレビで蛇石を取り上げていたので、一度は見なくてはと、狭い山道をたどる。途中、蛇石の案内看板もなく、この道で間違いないのかと不安になりながら進むと、橋の前に小さな看板がある。バス停もあり「蛇石」と書かれている。こんな小さな看板だけでは、見過ごしてしまいかねない。
・この看板も、蛇石のある川岸の説明看板、ベンチも新しい。先日のテレビ撮影を機に作ったのか、それとも、ジオパークの関係で整備されたので、取材にいったのかは定かでない。
・確かにヘビに見える。いな、うなぎかアナゴの方に近いようでもある。

・この近くの沼縁に蛇石の尾石があり、蛇石の頭をなでると、遠く離れた尾石が動くのだそうだが、こちらに行くのは寒いので、割愛した。

ヒヨドリ

ヒヨドリが
　残菜啄ばみ
　　膨らまる

・去年はヒヨドリの数が少なかったが、今年は、一転して多く見られ、畑の野菜に被害が出ている。特に、ブロッコリーの葉が食べつくされ、スダレ状になっている。

・我が家のベランダにもたくさん来ている。生ジュースを絞ったカスを植木鉢に撒いておくと、入れ替わりたちかわり来て啄ばむ。寒さを防ぐためか羽を膨らましている。よく観察してみると、みかん、りんご、人参、ケールの順に食べている。
・ヒヨドリは秋の季語だが、我が家では冬の寒い時期にやってくる鳥だ。

・伊東の市鳥である羽色の美しいイソヒヨドリも見かけるのだがこちらは、ベランダにけっして来ない。食べ物の嗜好が異なるのか、それとも、縄張りでもあるのだろうか？

メジロたち
　夫婦仲良く
　　蜜柑食い

・メジロは夏の季語だが、我が家では冬によくやってくる。
・初夏には裏庭にあるブラシの木の花によく群がっているが、この時期に、ベランダの餌場に蜜柑をさしておいてもけしてやってこない。来るのは冬の寒い時期だけだ。
・ベランダに打ち付けた枝に半裁した蜜柑をさしておくと、必ず２匹ずつペアでやってくる。これが４匹になることはけっしてない。近くの木の枝にじっと待機していて、先客が飛び立つと、すかさず、入れ替わる。ヒヨドリもくるが、ヒヨドリとメジロが一緒にみかんを啄ばむことはない。でも、今年は、生ジュースの絞りカスも提供しており、こちらにヒヨドリが行く確立が高いので、メジロが枝のみかんを啄ばんでいる姿がを多く見ることができる。

有機畑
　落ち葉堆肥で
　　春を待つ

・１月２６日、中伊豆体験農園で有機農法実演指導セミナーが開かれ、小生も参加した。
・３月に植えつけるジャガイモのための土作りだ。
・まず、３０センチ程度の溝を掘り、ここに、落ち葉、中熟堆肥、野菜クズ、米ぬか、クン炭、有機苦土石灰、そして畑の土を入れてよく混ぜ、その上に土を１０センチ程度かぶせる。
・約１ケ月で発酵が終了するので、そこにジャガイモを植えつける。
・セミナー受講後、体験農園、長者が原農園のジャガイモを植える予定の場所に、今回教わったとおりの手順で畑を準備した。

Photo俳句(2013-01　No.05)

http://p.booklog.jp/book/65461

著者：井上勝彦（陽香庵　百合樹）
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/atec/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/65461

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/65461

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ